

比叡山延暦寺・比叡山坂本へのアクセス



電車
 ●京都側から比叡山へ (JR京都駅からおよそ60分)
 <JR線・京阪電車・叡山電鉄・叡山ケーブル・叡山ロープウェイ利用>
 JR京都駅→JR京都線→東福寺駅【乗換】京阪東福寺駅→(京阪電鉄)→出町柳駅【乗換】出町柳駅→(叡山電鉄)→八瀬比叡山口駅【乗換】ケーブル八瀬駅→(叡山ケーブル)→ケーブル比叡駅【乗換】ケーブル比叡駅→(叡山ロープウェイ)→比叡山頂駅【乗換】比叡山頂駅→(山内シャトルバス)→延暦寺バスセンター下車すぐ

●大津側から比叡山へ (JR京都駅からおよそ55分)
 <JR線・京阪電車・坂本ケーブル利用>
 JR京都駅→JR湖西線→JR大津京駅【乗換】京阪大津京駅→(京阪石山坂本線)→坂本比叡山口駅→(徒歩10分)→ケーブル坂本駅→(坂本ケーブル)→ケーブル延暦寺駅下車 参道を徒歩8分

車 (京都東ICからおよそ30分)
 ●東京・名古屋から比叡山延暦寺へ
 名神高速道路をメインルートに、新名神高速道路経由京都東ICにて西大津バイパスへ、近江神宮ランプ経由、田の谷峠ゲートから比叡山ドライブウェイに入り延暦寺へ

●大阪・京都から比叡山延暦寺へ
 名神高速道路をメインルートに、京都東ICから西大津バイパスへ、近江神宮ランプ経由、田の谷峠ゲートから比叡山ドライブウェイに入り延暦寺へ

路線バス (JR京都駅からおよそ65分)
 JR京都駅・京阪三条駅・京阪出町柳駅より比叡山ドライブバス「比叡山頂行き」に乗車し「延暦寺バスセンター」下車

交通のご案内
比叡山内シャトルバス
 各寺域を結ぶ山内巡回バス
 比叡山頂(ガーデンミュージアム比叡)→東塔(坂本ケーブル口)→延暦寺バスセンター→西塔→峰道→横川
 運行期間:春分の日～12月の第1日曜日まで(期間中は10:00～16:20の間、30分間隔で運行)
 運休期間:冬期間(12月上旬～3月下旬)は運休。ただし、正月(1/1～1/3)を除く
 料金:160円(東塔～比叡山頂まで)～760円(比叡山頂～横川まで)
 比叡山内フリー乗車券(拝観割引券付き):大人1,000円・子供500円(1日乗り放題)
 ※平日と休日・GW・夏休み期間でバスダイヤが異なるため事前確認願います。
 ※延暦寺東塔地区のご参拝は「延暦寺バスセンター」にて下車。
 お問い合わせ:075-581-7189 (京阪バス山科営業所)

坂本ケーブル
 ケーブル坂本→ほうらい丘→もたて山→ケーブル延暦寺(所要時11分)
 年中無休で「毎時00分/30分発」で運行
 初発:3月～11月8:00/12月～2月8:30
 終発:4月・9～11月17:00/12月16:30/1～3月17:00/5～8月18:00
 料金:大人片道860円/往復1,620円
 小人片道430円/往復810円
 お問い合わせ:077-578-0531 (比叡山鉄道株式会社)

叡山ケーブル
 ケーブル八瀬駅→ケーブル比叡駅(所要時間9分)
 運行期間:春分の日～12月の第1日曜日まで(※冬期は休業)
 運行時間(上下とも):[平日]9:05～18:15[土日祝]9:00～18:15
 料金:大人片道540円/往復1,080円
 小人片道270円/往復540円

叡山ロープウェイ
 ロープ比叡駅→比叡山頂駅(所要時間3分)
 運行期間:春分の日～12月の第1日曜日まで(※冬期は休業)
 運行時間(上下とも):[平日]9:20～18:05[土日祝]9:15～18:05
 ※運行期間中、毎時1～4本運行
 料金:大人片道310円/往復620円
 小人片道160円/往復310円
 ※秋期期間は叡山ケーブル・ロープウェイともナイター営業しています。
 ※詳しくは叡山ケーブル・ロープウェイのホームページでご確認ください。
 お問い合わせ:075-781-4338 (京福電気鉄道株式会社)

坂本観光協会
 TEL.077-578-6565
 滋賀県大津市坂本6-1-13
 www.hieizansakamoto.jp
 発行:比叡山坂本活性化事業実行委員会
 平成30年度文化庁文化芸術振興費補助金(文化遺産総合活用推進事業)



世界文化遺産
比叡山延暦寺
 Hieizan Enryakuji



世界文化遺産 古都京都千年の風格

794(延暦13)年、桓武天皇が長岡京から山城国(現在の京都)へ都を移す時、国の安定と国民の平安な暮らしを願って、その名を「平安京」と名付けました。以来京都は、日本の首都として新陳代謝を繰り返し、一千年余りの歴史的時間を綴りあげてきました。明治維新後に東京に遷都されてからも、京都にはそれぞれの時代の文化を

清水寺 (創建:奈良時代)
清水の舞台で有名な観音霊場

※清水寺本堂および舞台は改修中ですが拝観できます。(2020年完成予定)



比叡山延暦寺 (創建:奈良時代)
山修山學の道場

※東塔・根本中堂および廻廊は改修中ですが参拝できます。(2026年完成予定)

示す文化財が数多く伝承され、歴史の軌跡を遺す古都として多くの人々から愛され続けています。

1994(平成6)年には、古都京都の文化財を代表する16社寺と1城がユネスコの世界文化遺産に登録されました。京都の歴史と伝統、そして自然環境が高い評価をうけることです。

教王護国寺 [東寺] (創建:平安時代)
空海の立体曼荼羅構想



©教王護国寺(東寺)五重塔

高山寺 (創建:鎌倉時代)
明恵上人再興、鳥獣戯画でも有名



龍安寺 (創建:室町時代)
鏡容池と石庭で名高い禅寺



仁和寺 (創建:平安時代)
御室桜が美しい門跡寺院



天龍寺 (創建:室町時代)
嵯峨嵐山、臨濟宗の名刹



西芳寺 [苔寺] (創建:奈良時代)



二条城 (創建:江戸時代)
徳川将軍の京都の居城



写真提供:元離宮二条城事務所

賀茂別雷神社 [上賀茂神社] (創建:古代)
京都最古の厄除け明神



本願寺 [西本願寺] (創建:南北朝時代)
桃山文化を伝える文化財の宝庫



賀茂御祖神社 [下鴨神社] (創建:古代)
賀茂氏神を祀る古代からの聖域



鹿苑寺 [金閣寺] (創建:鎌倉時代)



慈照寺 [銀閣寺] (創建:室町時代)



東山文化
侘び寂び
の粋

醍醐寺 (創建:平安時代)



醍醐の花見でも有名な修験者霊場

宇治上神社 (創建:古代)
現存する最古の神社建築



平等院 (創建:平安時代)
西方極楽浄土の観想



©平等院

山修山学の道場「比叡山延暦寺」の建築史

伝教大師最澄が、比叡山に延暦寺を創建して約1200年。比叡山延暦寺の現在の歴史的景観をつくりだしたのは、その間、災害や人災を被りながらも都度、再興があり、さらに修理や維持、移築や復古様式による造営によって新陳代謝を支えた人々の尽力によるものです。「建築と人」を切り口に、比叡山延暦寺の現在の姿を読み解きます。

(I) 創建～三塔形成期

創始者・伝教大師最澄は比叡山での修行を通し、大乘仏教こそが末法を生きる人々の救済の道と考え、比叡山を山修山学の道場とするための基礎づくり心血を注ぎました。最澄入滅後は、弟子の義真、円澄、円仁、円珍が遺志を継ぎます。最澄の伽藍整備構想を基礎に、独自の計画を盛り込んで、東塔の拡充、西塔の整備、横川の開創をし、三塔体制の基盤がつくられました。

最澄 桓武天皇との出会いにより、延暦寺は国家鎮護の寺へ

伝教大師最澄による比叡山延暦寺の創建は788(延暦7)年、最澄自ら刻んだ薬師如来を本尊とする一乗止観院の建立に始まります。当院は薬師堂、文殊堂、経蔵の三棟で構成され、天台止観の根本道場としました。時は桓武天皇の平安京遷都直前にあり、京都の鬼門を護る鎮護国家寺院とするの詔が下り、794(延暦13)年9月には、一乗止観院の盛大な初度供養が行われました。818(弘仁9)年には比叡山の伽藍構想、六所宝塔・九院十六院などを計画し、その後の伽藍計画の基礎をつくります。822(弘仁13)年、最澄入滅。奇しくもその7日後に悲願であった大乘戒壇院の勅許が下り、翌年、勅額を賜り正式名称は「延暦寺」となりました。戒壇院は、827(天長4)年に初代座主・義真により創建されました。



伝教大師像
延暦寺蔵

円澄 西塔の整備を進め、釈迦堂(転法輪堂)を創建。

第二座主・円澄や恵亮により西塔の整備は進みました。825(天長2)年に法華堂、834(承和元)年には釈迦堂を建立し、供養会に空海や護命を招きました。その後、恵亮が最澄建立の相輪様の傍らに堂宇を新造して宝幢院とし、惟仁親王の御願寺として発展させました。

円仁 天台密教を樹立し、横川開創と東塔の充実を図る

最澄に学び、全国行脚の布教活動から戻った40歳の慈覚大師円仁が、横川に草庵を結び、みずから写経した法華経を納める小塔(のちの如法塔)を建てたのが横川の起源です。その後円仁は45歳で入唐し9年後に帰国。翌年の848(嘉祥元)年9月、横川に根本観音堂(のちの横川中堂)を創建し、横川発展の基礎を固めました。



円仁像
(聖徳太子及び天台高僧像のうち)
国宝 一乗寺蔵
画像提供 奈良国立博物館

一方、円仁時代の東塔は、入唐中の847(承和14)年、仁明天皇の御意で定心院が創建され、これを皮切りに延暦寺の御願寺化が進みます。円仁帰国後の851(仁寿元)年、東塔に常行堂を創建し五台山で学んだ五会念仏を始修、常行堂念仏の始まりです。最澄滅後、伝教大師御廟として浄土院を創建して、856(齋衡3)年、廟供を始修。861(貞観3)年、清和天皇の勅願により文殊楼院を造営、最澄の九院・十六院計



画の常坐三昧堂(一行三昧院)と円仁の文殊信仰を併せ持つ仏堂となりました。862(貞観4)年、文徳天皇の勅願により天台密教の根本道場として法華総持院を創建。一乗止観院とあわせて最澄が主張した円密一致の理念に基づく重要な堂宇が東塔に揃いました。さらに清和天皇により、非行非坐三昧堂として随随意堂を建立。円仁入滅の翌年には、常坐三昧堂が建てられ、最澄が創建した法華三昧堂に加え、四種の三昧堂が東塔に揃いました。また888(仁和4)年には、円仁の念願であった赤山禪院創立の勅命が下され、弟子の手により比叡山西麓に創建され、以来赤山明神は日吉山王と並んで天台宗の守護神となりました。

相応 回峯行の基礎をつくる

円仁の弟子・相応は865(貞観7)年無動寺谷に明王堂を創建し、回峯行の基礎をつくりました。

円珍 根本中堂の原型を築く

853(仁寿3)年から858(平安2)年まで入唐求法した智証大師円珍は、円仁とともに天台密教を完成させました。円珍の建築に関する最大の業績は、882(元慶6)年、最澄の創建した根本薬師堂・文殊堂・経蔵を一棟にまとめ、桁行九間の仏堂とし、現在の根本中堂の原型を築いたことにあります。また円珍は園城寺(三井寺)を天台別院として再興しました。



智証大師坐像
重文 三井寺蔵

(II) 良源による伽藍整備期～動乱期

平安中期に入ると、935(承平5)年、比叡山開創以来の大火災に見舞われ、根本中堂ほか四十数ヵ所が焼失します。比叡山は荒廃をきわめていました。これを直ちに復興させ住侶三千衆徒といわれる空前の繁栄をもたらしたのが慈恵大師良源(元三大師)です。

比叡山の特色は、鎮護国家の寺であったことから天皇の御願寺も増加し、朝廷や貴族と密接な関係や外護を得ながら発展したことです。このような流れの中で、山外には比叡山の流れを汲む門跡寺院が形成され、各門跡が比叡山の堂宇僧坊を分担して管領。鎌倉時代は寺領を拡大し強大な経済力を誇るようになります。その後、鎌倉仏教の祖師方を多く輩出しましたが、一方で門跡間の相剋や三塔間の派閥争いにより、武力化の方向をたどりました。御興振りで知られる僧兵による朝廷への強訴などにみられるように、中世の比叡山は武力抗争の耐えない暗黒の時代でもありました。

良源 三塔体制を確立し、仏教の母山の土壌をつくる

966(康保3)年、慈恵大師良源が第18代座主に就任したわずか2ヵ月後の大火災で、東塔の主要堂宇は焼失します。良源はこれらの災害からの再建に尽力し、972(天禄3)年、文殊楼・大講堂・総持院・延命院・四王院の五堂の供養大法会を盛大に執り行いました。その後も造営は継続し、979(天元2)年、西塔常行堂・釈迦堂・鐘楼が、翌年には根本中堂に初めて廻廊を設け、壮大な堂として再建しました。

一方横川に目を転じると、円珍の入寂後、円仁に対立する円珍派の座主が続き、円仁開祖の横川の衰退は著しかったといえます。良源は藤原摂関家の忠平や師輔の外護を得て、954(天曆8)年から29年をかけて、横川に楞嚴三昧院(講堂・法華堂・常行堂)を創設。火災からの復興が一段落した972(天禄3)年、良源は横川を独立させ、東塔・西塔・横川の三塔体制を確立しました。このような比叡山の伽藍の復興だけでなく、天台教学の興隆、山内の規律の維持などに取り組み、『往生要集』で有名な恵心僧都源信をはじめ優秀な弟子を輩出しました。



慈恵大師坐像
重文 延暦寺蔵

貞盛 良源ゆかりの西教寺を再興し 不断念仏道場とする

19歳の時に比叡山に上り慶秀和尚に師事、20年間山に籠り天台の学問を究めました。当時は応仁・文明の乱が続く下克上の時代でした。慈摂大師貞盛は黒谷青龍寺に籠り、日課六万遍の称名念仏を修め、社会の秩序を正し世人に安心立命を与えるには、道義を強調する円戒と弥陀本願の念仏以外には無いことを悟ります。そこで良源や源信らの修行の地、西教寺(比叡山坂本)に入り、堂塔と教法を再興、不断念仏の道場とされました。以来全国に約四百余りの末寺を有する総本山となりました。



慈摂大師(貞盛上人)坐像
西教寺蔵

(III) 新生・比叡山延暦寺

室町末期戦国時代、浅井・朝倉軍をかくまったことが発端となり、1571(元亀2)年、織田信長によって、比叡山は全山焼き討ちになりました。四日間に渡る放火により比叡山三塔十六谷の堂塔伽藍は一字も遺さず、ことごとく灰塵に帰したと伝えられています。創立以来の最大の苦難であり、建築的にも政治的にも延暦寺の中世の終焉を意味するものでした。

しかし信長没後約5ヵ月経った1582(天正10)年、山徒32名が帰山し延暦寺再建計画を立てられます。それは、探題豪盛(南光坊)と施薬院全宗らは止観院(東塔)、観音寺詮舜らは宝幢院(西塔)、恵心院亮信らは楞嚴院と分担を決めて再興を約束するものでした。その後、施薬院全宗と観音寺詮舜らは豊臣秀吉との交渉にあたり、1584(天正12)年、山門再興許可が下り、本格的な山門復興に着手しました。秀吉の再建に引き続き徳川家康も比叡山を厚く外護し家光もこれを引き継ぎました。

詮舜 秀吉に働きかけ、復興の先陣をきる。

西塔北谷の正教坊詮運に師事し、1571(元亀2)年に回峰行の苦行を行ないました。焼討ちの時は、兄の賢珍が住職を務めていた観音寺に寓居しました。延暦寺再建計画を誓った施薬院全宗らと詮舜は各地から寄付を募り、秀吉に再興の許可を依頼します。秀吉はなかなか首を縦に振りませんでした。1584(天正12)年、ようやく都の鬼門守護と国家鎮護のための寺院として再興の許可が下り、銀一万貫が寄付されました。こうして詮舜が所属していた西塔から復興が始まりました。釈迦堂の再興を願っていたところ、1595(文禄4)年、秀吉の命により三井寺の弥勒堂が移築されることに。この時、秘かに焼討ちを逃れて江州高嶋郡水尾邑へ移されていた本尊は、詮舜により釈迦堂に無事安置されたといえます。また日吉社の復興にも力を注ぎ、西塔釈迦堂再建の余材をもって釈迦堂の再建と同時に生源寺を再興しました。



観音寺詮舜
伝海北友松筆 観音寺蔵

天海 徳川家光へ進言し 本格的な復興へ

関ヶ原の戦いののち、徳川の治世になると、1601(慶長6)年には延暦寺に対して寺領5000石が下賜され、名実共に復興の基盤が築かれました。1604(慶長9)年には淀の方によって横川中堂が再興されます。1607(慶長12)年には天海が東塔南谷の南光坊に入り比叡山探題執行として山門復興に尽力しました。その後天海は関東に移り、第三代将軍徳川家光に仕え、1625(寛永2)年には関東天台宗の総本山(東叡山)として寛永寺を建設して、天台宗の発展に貢献しました。根本中堂の再建などの本格的な復興は1634(寛永11)年から始まりましたが、天海は根本中堂完成の翌年に没し、1648(慶安元)年に慈眼大師号を送られました。また坂本には供養塔である慈眼堂が1646(正保3)年が建てられました。一連の復興は寛文頃まで継続し、延宝年間(1673~1681)に戒壇院が造営され、各堂宇の多くも17世紀中には造営されました。



慈眼大師坐像
重文 延暦寺蔵

(IV) 江戸中期から明治維新そして現在へ

江戸時代前期に伽藍の多くが整ったことで、江戸時代中期には諸堂の大修理が行われることはあっても大規模な新造はなされませんでした。

幕末を迎えると近代化の波が延暦寺にも押し寄せました。神仏分離令が出されると、東照宮と日吉大社は延暦寺から分離するなど体制が大きく変わりました。また目立った造営は見られなくなりました。

その後、昭和に入ると、火災などによって失った堂宇の建築は、根本如法塔や阿弥陀堂、法華総持院にみられるような復古様式の造営や、大書院のような移築活動へと変化しました。近代的建築の造営も見られますが、移築や復古様式による建設活動は、今も続いています。

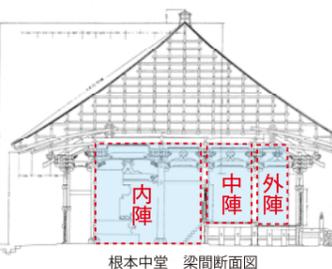
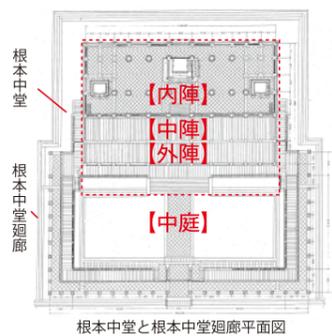
比叡山 東塔

大改修中
(2016~2026年)
改修中も参拝
できます。

比叡山延暦寺の総本堂

根本中堂

江戸期の天台様式美



儀式空間としての外観

現在の根本中堂は、一重入母屋造りの構造で、滋賀県下最大の大きさを誇る江戸時代初期の建築です。中堂の前庭を廻廊がコの字型に取り囲み、正面中央に唐破風付中門が設けられています。桁葺屋根の廻廊は復廊形式で内まわりの床は板張り、中央に仕切り板があり外まわりからは内部を見られない神秘的な構造となっています。廻廊は通路だけでなく儀式空間としても用いられています。

天台様式の内部構造

根本中堂の内部は、外陣と中陣、内陣に分れています。僧がお勤めを行う内陣は、参拝者のための中陣や外陣よりも3mほど低い石敷の土間で、須弥壇と宮殿を三具置き、中央には本尊の秘仏薬師瑠璃光如来をお祀りしています。内陣を土間とすることは天台宗の仏堂の古い形式を今に伝えるものですが、仏様と参拝者の目の高さと同じになるように設計され「誰もが仏様になることができる」という法華一乗を表しています。

外部意匠

内部意匠



東塔、主要堂宇の歴史

788 延暦7年
最澄、自刻の薬師如来を本尊として、一乗止観院を創建する。

794 延暦13年
桓武天皇の御願により9月3日、一乗止観院の初度供養を行う。

818 弘仁9年 最澄、六所宝塔・九院・十六院・結界地など、比叡山の堂塔伽藍構想を発表。存命中に一乗止観院・八部院・山王院・法華三昧堂・西塔の相輪櫓を建立する。

822 弘仁13年 最澄入滅。七日後に念願の大乗戒壇建立の勅許が下る。

824~827
義真、大講堂と大乗戒壇院を建立。

851~ 円仁、常行堂を創建し、五会念仏を始修する。この頃から、各代天皇の御願寺化が進む。文殊楼院(一行三昧院)・覚意三昧院・法華総持院・浄土院の四院が整備される。

887 仁和3年
円珍、一乗止観院を改修、薬師・文殊・経蔵の三堂を九間四面の大堂に摂す。

935~966 比叡山開創以来の大火災が続き、根本中堂他四十数カ所を焼失。さらに東塔の主要堂舎を焼失す。

967~981 良源、火災からの復興に力を注ぐ。法華三昧院、常行三昧院、文殊楼、大講堂、延命院、四王院、法華総持院などを再興す。

980 天元3年 良源、東塔北谷を埋め立て、根本中堂の大改造を行い、11間の大堂を建立す。

<平安末~鎌倉~室町時代は、鎌倉仏教の各宗各派の祖師方を輩出する一方で、門跡間の相剋や三塔間の派閥争いなどにより武力化が進んだ。政治的抗争にも巻き込まれ、火災も多く山中は荒れ果てた。>

1571 元龜2年 織田信長、9月12日比叡山全山ならびに山麓日吉山王社・西教寺を焼き討つ。

1584 天正12年 豊臣秀吉、山門再興の許可を下す。

1607 慶長12年 天海、東塔南谷の南光坊に入り山門復興に尽力する。

1642~1676
寛永19年~延宝年中徳川家光の命により根本中堂・大講堂・文殊楼、戒壇院などの主要な堂宇が再興。以降、徳川幕府による御用作事は継続。

1798 寛政10年 根本中堂、屋根桁を銅板葺に変更。

1937 昭和12年 比叡山開創1150年記念として総持院の地に阿弥陀堂を創建する。

1955 昭和30年
根本中堂、昭和の大改修。

1987 昭和62年 比叡山開創1200年を記念して、法華総持院を550年ぶりに復興する。

2016~ 平成28年 根本中堂大改修始まる。



中国五台山に由来する延暦寺正門



重文 文殊楼

文殊楼は坂本から東塔に至る本坂の表門で、歴史は古く、861(貞観3)年に慈覚大師円仁が唐の五台山の文殊菩薩を勧請して文殊楼を創建されました。最澄の九院・十六院計画の常坐三昧堂(一行三昧院)と円仁の文殊信仰を併せ持つ仏堂です。四隅には円仁が五台山から将来した霊石が埋められました。その後数度にわたり焼亡しつつもその都度、再建されました。現在の建物は焼き討ち後の1642(寛永19)年の再建によるもの。

構造形式:木造・桁行三間・梁間二間・二重・入母屋造・銅板葺
建築年代:1668(寛文8)年『天台座主記』

学問修業の場を象徴する講堂



重文 大講堂

大講堂はその名が示すとおり、学問の道場としての機能を持っています。僧侶の試験ともいえる「法華大会広学堅義」や「論義法要」が行われる主要な堂宇のひとつです。信長の焼き討ち後、1642(寛永19)年に根本中堂とともに復興された建物は壮麗であったといえます。しかし1956(昭和31)年の火災で焼失。現在の建物は坂本の東照宮の讚仏堂(寛永11年建立)で、1964(昭和39)年にここに移築されました。



構造形式:木造・桁行七間・梁間六間・一重・入母屋造・向拝三間・銅板葺
建築年代:1634(寛永11)年
『比叡山写真帖』(明治45年発行)より

最澄の悲願、大乘戒を授ける仏堂



重文 戒壇院

伝教大師最澄、念願の大乗戒壇の建立は、入寂1週間後に勅許を得られました。その5年後の827(天長4)年に初代天台座主・義真により戒壇院は創建されました。以降、焼亡と再建を繰り返しましたが、現存する建物は信長の焼き討ち後、延宝年間に再建されたもの。江戸初期の特徴を持つ和様と禅宗様(唐様)の折衷様式の建物で、毎年、円頓授戒や円仁始修の舍利供などが行われています。

構造形式:木造・桁行三間・梁間三間・一重・裳階付・宝形造・正面軒唐破風付・とち葺
建築年代:1673~1681(延宝)年間

比叡山 西塔



西塔本堂・比叡山最古の建造物

重文 釈迦堂 (転法輪堂)

構造形式: 木造・桁行七間・梁間七間・一重・入母屋造・とち葺形銅板葺
建築年代: 貞和3年(1347)

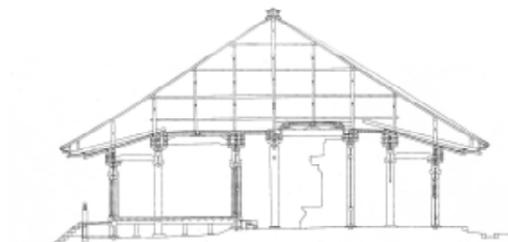
鎌倉初期の天台様式美



内陣の大虹梁

園城寺の弥勒堂(金堂)を豊臣秀吉が移築

西塔の中堂である転法輪堂は、伝教大師最澄の自作とされる本尊、釈迦如来が祀られていることから、釈迦堂の名前でも親しまれます。現在の建物は秀吉の命により園城寺弥勒堂(貞和3年頃建築)が移築されたもの。信長の焼き討ちによる焼失後の1595(文禄4)年のことです。この時の復興は西塔を中心に行われ、比叡山延暦寺全体の復興の象徴となりました。比叡山山内で最も古い建築となります。



釈迦堂転法輪堂 断面図



須弥壇

平安後期の天台様式が現代に息づく

和様の建築様式で統一された堂々とした佇まいが特徴です。堂内も板張りの外陣と、外陣より一段低い土間の内陣に分かれ、平安後期の天台様式を色濃く残します。移転に際し、弥勒堂の形式を西塔中堂にふさわしくするため、内陣の柱2本の撤去および大虹梁の挿入、小屋組、天井、壁形式の変更、側面腰長押の撤去などを行ったといいます。また焼き討ちを密かに逃れて江州高嶋郡水尾邑に匿われていた本尊は、再興後、観音寺詮舜によって釈迦堂に戻されました。

【見どころ】鎌倉初期に近い純和様の建築



天台様式の堂々とした建物



釈迦堂外陣

西塔、主要堂宇の歴史

- 820** 弘仁11年
最澄、西塔に相輪櫓を創建す。
- 834** 承和元年
円澄、釈迦堂を創建。空海や護命を招いて供養会を修す。
- 845~851** 嘉祥年中
恵亮、惟仁親王(清和帝)の御願寺として宝幢院を創建す。以降御願寺化がすすむ。
- 893** 寛平5年
静観・顕祚、常行堂を創建す。
- 923** 延長元年
増命、西塔院(山城宝塔院)を創建す。
- 948** 天曆2年
延昌、村上天皇の御願により西塔大日院を創建す。
- 947~957** 天曆年中
村上天皇の御願により勸学堂(丈六堂)を創建す。
- 996** 長徳2年
覚慶、一条院の御願により、勝蓮華院・大乘院を創建す。
<平安末~鎌倉~室町時代にかけては鎌倉仏教の各宗各派の祖師方を輩出。一方では、門跡間の相剋や三塔間の派閥争いなどにより武力化がすすみ、政治的抗争にも巻き込まれ室町末期には山は荒れ果てた。>
- 1571** 元龜2年
織田信長、9月12日比叡山全山ならびに山麓日吉山王社を焼き討つ。
- 1584** 天正12年
豊臣秀吉、山門再興の許可を下す。翌年には西塔再建のため銀一万貫の寄進が成された。
- 1595** 文禄4年
豊臣秀吉の命により、三井寺の弥勒堂を移築して釈迦堂を再興す。
常行堂・法華堂・相輪櫓を再興。
- 1631** 寛永8年
暴風によって被害を被る。
- 1661** 万治4年
御廟浄土院を再興す。
- 1664** 寛文4年
堯恕、恵亮堂を建立す。
- 1699** 元禄12年
「開山堂侍真条制」を定め、御廟浄土院の十二年籠山行が確立す。
- 1781** 天明元年
第十代將軍徳川家治により山上山下の諸堂舎(西塔は政所・常行堂・法華堂など)の大修理が行われた。
- 1811** 文化8年
転法輪堂の修理される。
- 1895** 明治28年
相輪櫓が鋳直された。
- 1999** 平成11年
平成十年の台風6号で倒壊した相輪櫓を再建す。

法華と念仏が一体であることの象徴



重文 にない堂 (常行堂・法華堂)

にない堂とはかつて延暦寺の僧であった弁慶が、常行堂・法華堂をつなぐ渡り廊下を天秤棒(にない棒)に見立てて担いだとの伝説からの呼称です。常行堂では現在も念仏三昧の修行である常行三昧を、法華堂では法華三昧の修行が行われ、ふたつのお堂が繋がっていることから、比叡山において法華と念仏が一体であることを現しています。



常行堂・法華堂
構造形式: 木造・桁行五間・梁間五間・一重・宝形造・向拝一間・とち葺
建築年代: 1595(文禄4)年

焼討ちを免れた現存する唯一の堂宇



重文 瑠璃堂

西塔から黒谷に向かう途中にある堂宇で、焼き討ちを逃れた現存する唯一の建築といわれています。唐様が施された入母屋造松皮葺きで、室町末期の建築様式を今に残します。また西塔北谷にあった古仙の靈輦に最澄自作の薬師如来を安置したのが始まりとも伝えられ、本尊は薬師瑠璃光如来が祀られています。

構造形式: 木造・桁行三間・梁間三間・一重・入母屋造・向拝一間・松皮葺
建築年代: 室町後期

最澄の遺志を継ぐ侍真僧が守る



重文 浄土院

十二年籠山行を行う侍真僧によって守られる山内で最も清浄な聖域。焼き討ち後、1661(万治4)年から翌年にかけて行われた本格的な復興の遺構が、敷地内に群として残ります。院内の阿弥陀堂には伝教大師最澄自作の釈迦・弥陀・薬師の三尊仏のひとつといわれる阿弥陀仏が本尊として祀られています。



構造形式: 木造・桁行五間・梁間三間・一重・入母屋造・銅板葺・正背面軒唐破風付
建築年代: 1662(寛文2)年

比叡山
横川

遣唐使船をモデルにした、横川の本堂。

横川中堂

現代に甦る舞台造り



『比叡山写真帖』(明治45年発行)より

災禍をまぬがれた聖観音立像

慈覚大師円仁が約9年間の入唐求法の旅から帰国後、848(嘉祥元)年に創建し、聖観音像と毘沙門天像を安置しました。この両尊は入唐求法の際、大風に遭遇した時に観音力を念じたところ毘沙門身が現れ嵐が静まったという霊験により祀られたといわれます。その後良源が横川中堂を改造した時、両尊に加えて不動明王像が祀られました。また本尊聖観音立像(重文)は平安期藤原時代の典型的な木像といわれます。



横川中堂内陣

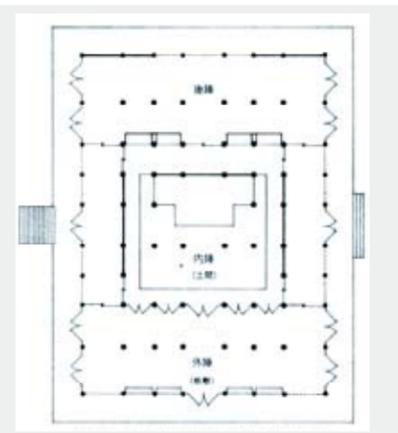
朱色鮮やかな総丹塗りの舞台造り

信長の焼き討ち後は、1584(天正12)年徳川家康の寄進により恵心院亮信が再建しました。さらに1604(慶長9)年、豊臣秀頼の母淀の方が願主となり改造。遣唐使船をモデルにした船形の屋根と懸崖に建った舞台造りが特徴の建物は、惜しくも1942(昭和17)年の夏に落雷のため焼失しました。現在の建物は1971(昭和46)年、伝教大師の千百五十年御遠忌を記念して当時の姿のまま再建したものです。

構造形式:RC造・一重・入母屋造・銅板葺
建築年代:昭和46年(1971)



横川中堂正面



昭和17年焼失の横川中堂平面図
『延暦寺の建築史的な研究』(清水敏著/中央公論美術出版)より

横川、主要堂宇の歴史

833 天長10年
円仁、40歳の時、はじめて横川の草庵に籠り、書写した法華経を納める小塔(後の如法堂)を建立。

836 承和3年
円仁、横川の地を首楞嚴院と称し、「首楞嚴院式」を定める。

848 嘉祥元年
円仁、唐より帰国後、横川中堂(根本観音堂)を創建、横川発展の基礎を固める。

954~983
藤原師輔と冷泉天皇により、楞嚴三昧院(講堂・法華堂・常行堂)が造営される。

967 康保4年
良源、横川定心房にて四季講を始修す(四季講堂)

972 天禄3年
良源、横川を独立させ、三塔が確立する。

975 天延3年
良源、横川中堂を改造して聖観音・不動・毘沙門天の三尊形式とする

983 永観元年
藤原兼家、恵心院を創建。

985 永観3年
香芳谷に良源の廟、慈恵大師御廟を建立。

990~995 正暦年中
源信、霊山院を創建して霊山釈迦講を行う。

1005 寛弘2年
源信、華台院を創建し、迎講を始修す。
<平安末~鎌倉~室町時代にかけては鎌倉仏教の各宗各派の祖師方を輩出。一方では、門跡間の相剋や三塔間の派閥争いなどにより武力化がすすみ、政治的抗争にも巻き込まれ室町末期には山は荒れ果てた。>

1031 長元4年
覚超、如法経を納める銅筒を鑄造して如法塔の地下に埋納す。

1571 元龜2年
織田信長、9月12日比叡山全山ならびに山麓日吉山王社を焼き討つ。

1584 天正12年
豊臣秀吉、山門再興の許可を下す。

1584~92 天正年中
横川中堂・四季講堂など一応の再建(仮堂)をみる

1604 慶長9年
淀の方、願主となり横川中堂を再興す。

1925 大正14年
如法塔を焼き討ち後初めて再興す。(1923年根本如法塔跡から経筒・国宝の金銅経箱が発掘されたのを受け)

1942 昭和17年
横川中堂が落雷のため焼失、本尊聖観音像は難を逃れる

1971 昭和46年
横川中堂を復興す。

慈恵大師良源の住坊跡、名僧育成の拠点



構造形式:木造・桁行五間・梁間四間・一重・入母屋造・瓦・銅板葺
建築年代:1652(承応元)年

重文 元三大師堂

横川中堂の東にあり、慈恵大師良源の住坊であった定心房が起源。春夏秋冬に学徒を集め大乘經典の講經と論義を始めたことから四季講堂と呼ばれるようになりました。元三大師とは良源入滅の日が正月三日であったことから。建物は後水尾天皇の御願により再建され、たびたび修復の手が加えられ現在に至ります。「角大師」やおみくじも有名。

恵心僧都源信の旧跡、念仏三昧の道場



構造形式:木造・方三間・一重・宝形造・銅板葺
建築年代:17世紀中期(推定)

恵心堂

良源座主の時、藤原兼家の本願で建立されました。その後叡山浄土教を大成した源信がここに籠って修行し、『往生要集』などの著述に専念しました。源信を恵心僧都と呼ぶのはお堂の名前に因みます。焼き討ち後は横川中堂と同じく亮信が再建。現在の建物は比叡山坂本の生源寺横にあった別当大師堂を移築し、阿弥陀如来を本尊に祀って恵心堂としたものです。

円仁書写の経文蔵の跡に建立



構造形式:木造・方三間・多宝塔
建築年代:1925(大正14)年

根本如法塔

慈恵大師円仁が40歳の時、重い病にかかり横川の草庵(首楞嚴院)に籠り四種三昧を修し、3年に渡って法華経の写経に励みました。その書写経を安置する小塔を建てたのが根本如法塔のはじまりです。後に恵心僧都源信により改造されました。しかし焼き討ちにより焼失。1925(大正14)年に再建された現在の塔は山口玄洞と安井梢次郎の手によるものです。

参考文献:『比叡山諸堂史の研究』武覚超著 法蔵館2008年
『比叡山延暦寺建造物総合調査報告書』比叡山延暦寺2013年

比叡山
坂本



滋賀院門跡

格式高い天台座主の隠居所



宸殿

比叡山坂本は穴太衆積みが美しい里坊のまち

比叡山の山坊での修行は「論湿寒貧」といわれたように、厳しい山上の気候との戦いでもありました。東麓の坂本には厳しさに耐えられなくなった老僧や病弱の僧徒が保養する隠居所「里坊」がつけられ、良源をはじめ慈眼などが里に居を移した記録が残ります。しかし、これらの里坊も信長の焼き討ちによって灰燼と帰し、延暦寺や日吉社の復興とともに再建され、現在では、重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。



客殿



庭園 (国指定名勝)

江戸時代、滋賀院門跡を中心に復興が加速

滋賀院門跡とは古くは慈鎮和尚・慈円(1155～1225年)の里坊旧跡です。ここに延暦寺の慈眼大師天海が、後陽成上皇より北白川の法勝寺の高閣を賜り、1615(元和元)年に移築再建したことに始まります。以来天台座主の居所となりました。ここを中心に中世の道や社をそのまま残し、復興されたと考えられます。

1878(明治11)年、火災により焼失。その後、山上から建物を移築して再興。境内には内仏殿、宸殿、書院、庫裡などが建ち並び、宸殿西には小堀遠州作の庭園があります。



書院

伝教大師最澄の生誕地に建立された霊地



構造形式：桁行九間・梁間五間・入母屋造・銅板葺・正面
向唐破風車寄付・桁行二間・梁間一間・銅板葺
建築年代：1731(享保16)年

生源寺

伝教大師最澄誕生の地と伝えられ、境内の東南の隅には最澄の産湯の水を汲んだという古井戸が残ります。江戸時代は西塔の総里坊として寺務一切を総括していました。現在の建物は、表門、本堂、鐘楼、客殿、別当大師堂で構成されています。本堂は1595(文祿4)年に観音寺詮舜が西塔釈迦堂再建(園城寺弥勒堂を移築)の余材をもって再興され、後に改装されました。本尊は、十一面観音菩薩像を祀ります。大師の父百枝公・母妙徳夫人の御影も安置されています。

家光の命により建立、慈眼大師天海の御廟



構造形式：方三間・宝形造・棧瓦葺
建築年代：1646(正保3)年

重文 慈眼堂

滋賀院の西隣にあります。天海の死後間もない正保3年(1646)に創建されました。奉行は小堀遠州です。粽・木製礎盤付の円柱・詰組・四半敷・棧唐戸・花頭窓など禅宗様でまとめた三間堂で、内部には、須弥壇上に厨子、木造慈眼大師坐像(重文)を安置しています。その前には天蓋付きの祈祷壇を設けています。お庭には端整な石畳や石燈籠、供養塔・歴代天台座主の墓などもあり、見応えがあります。

今に継承される慈恵大師良源ゆかりの里坊



求法寺走井堂 (県指定文化財)

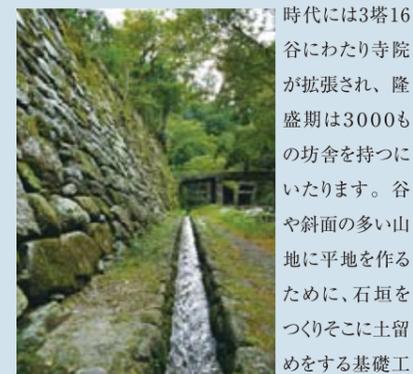
第四世安恵座主の里坊を起源とし、慈恵大師良源(元三大師)が比叡山に初登山の時、休息されました。焼き討ち後に再興された里坊のひとつ。焼き討ち前の『比叡山三塔図』(三千院・滋賀院屏風)に描かれた三橋辺りにある「慈恵大師里坊」に当たります。本尊は1267(文永4)年の銘のある慈恵大師坐像(重文)。

歴史に育まれた穴太衆積み

信長の「延暦寺焼き討ち」は穴太衆造成の堅牢さを証明。

大津市滋賀里周辺に残る古墳群は6～7世紀初頭に渡来人が築造しました。これらの古墳群の石の配置の仕方が、穴太衆積みに似ていることから朝鮮系の渡来人が穴太衆のルーツと考えられています。

788年、最澄が比叡山に創建した延暦寺は、平安



時代には3塔16谷にわたり寺院が拡張され、隆盛期は3000もの坊舎を持つにいたります。谷や斜面の多い山地に平地を作るために、石垣をつくりそこに土留めをする基礎工

事を穴太衆が請け負いました。

1571年の比叡山焼き討ちの時、丹羽長秀(にわ



ながひで)が、燃え尽きた坊舎の後始末に石垣を壊そうとしてまったく崩せなかった

ことを信長に報告したといひます。この時信長は、比叡山に使用されていた石垣の堅牢さを悟り、



株式会社栗田建設 14代石匠 栗田 純司氏 (国選定技術保持者)

安土城築城に活用しました。これにより穴太衆の名は全国に轟き、中世から現代まで、全国の築城はもとより造成工事に使われるようになりました。

今は唯一、比叡山坂本にある栗田建設によって伝承される穴太衆積みの技術は、美しく積みほどこに堅牢で地震にも強いことが再評価され、新名神高速道路の造成などにも採用されています。穴太衆積みの残る坂本の里坊の町を歩くと、自然石の形のままだに「石の声を聴き、石に従って」積み上げられた穴太衆積みの石垣(市指定文化財)をふんだんに見ることができます。

日吉大社

全国3800余の日吉・日枝・山王神社の総本宮

はふりへのゆきまる
祝部行丸の情熱が復興を实らせる

信長の比叡山焼き討ちで日吉社は社殿・宝物などの全てを焼失。日吉社の神官行丸の奔走により日吉社は蘇りました。

焦土から立ち上がった行丸は1575(天正3)年、八所神社(伊香立村)に日吉社の山王七社の神々を勧請。ここを拠点に再興に乗り出しました。一方で、歴史や祭祀の次第、境内図などを記録した『日吉社神道秘密記』『日吉社神役年中行事』『山王諸社絵図』などの執筆を開始。後にこれらは日吉社再興の基本資料となりました。1582(天正10)年、本能寺の変で信長が倒れるや復興事業は急展開し、翌年から日吉大社社殿の再建が始まりました。行丸は1592(天正20)年、81歳で亡くなります。復興はその後も順調に進み、1601(慶長6)年頃まで続きました。



二宮橋(重文)



牛尾宮と三宮(重文)

西本宮

白山宮(重文)

樹下宮(重文)

古くから山王信仰の総本宮として栄えた日吉大社。比叡山延暦寺を開いた伝教大師最澄が日吉大社の祭神を延暦寺の御法神としたことから、この地に神々と仏が融合した一大宗教世界が築かれました。戦国時代、信長の焼き討ちにより一切を失うことになりましたが、一人の神官の情熱が復興に導きました。

神仏習合のプロトタイプ



八王子山をご神体とする
古代信仰が日吉社のはじまり。

山王祭 日吉大社の縁起が 一幅の絵巻のように

791(延暦10)年、桓武天皇が日吉社に2基の神輿をご寄進されて以来1200年以上の歴史を有する例祭です。西本宮の大己貴神と、東本宮の大山咋神のご鎮座の由来をたどりながら、天下泰平・五穀豊穡をお祈りします。



日吉造り

桁行五間、梁間三間、桧皮葺き、正面と左右に庇がつく社殿形式を日吉造りといいます。聖帝造りともいい、現存する社殿としては、西・東本宮と宇佐宮のみに見られます。各本殿の外陣の床下にある空間は下殿と呼ばれます。もう一つの祭祀空間で仏事が行われていたと伝わります。神仏習合の名残のひとつです。

重文 宇佐宮本殿



国宝 西本宮本殿



国宝 東本宮本殿



山王鳥居(県指定文化財)
一般的な神明鳥居の上に、山に見立てた合掌組の東がついた日吉社特有のもの。神仏習合の象徴といわれます。

真盛上人

比叡山の真盛上人は、1486(文明18)年に西教寺に入寺。堂塔と教義を建て直し、不断念仏の道場としました。真盛の念仏は、日吉山王の使者である猿までが上人の教化を受けて念仏を唱えていると語られるほど(伝説の「身代わりの手白猿」より)民衆の心を捕え、その足跡は江州・越前・伊賀・伊勢を中心に広がって信仰を集めました。



桃山・江戸期の 風格ある建築様式

比叡山横川に通じる登り口近くにある、天台真盛宗の総本山です。比叡山横川の流れを汲む末寺で、慈恵大師良源をはじめ恵心僧都源信などが入寺し、その後真盛上人が再興。信長の焼き討ちで焼失後の復興は、明智光秀の奔走によるものです。



本殿

重文 本堂

現在の本堂は1739(元文4)年に建立。総樺[けやき]入母屋造りで、樺の材は紀州徳川家、時の徳川吉宗公から寄進されたものです。特に正面の欄間(十六羅漢)や須弥壇(籠刻)はすべて樺の素木造りで、江戸初期の特色を表す豪華な装飾が施されています。

重文 客殿

安土桃山時代の後半、1598(慶長3)年に客殿が移転されました。もとは伏見城にあった旧殿で、大谷刑部吉隆の母、山中長俊守内室により寄進されたものです。質素で落ち着いた桃山様式を今に伝える数少ない建物です。



客殿庭園

客殿の裏には小堀遠州作の客殿庭園があります。裏山の急傾斜の山畔部を巧みに利用し、丸刈角刈の小刈込を駆使した観賞庭園です。

西教寺

比叡山横川の流れを汲む天台真盛宗総本山



明智光秀による 復興の先駆け

当時は約10万坪の境内に42の堂塔伽藍が建ち並ぶ立派なお寺でしたが、信長の比叡山焼き討ちの際に炎上。その直後に坂本城の城主となった明智光秀は西教寺の檀徒となり、復興に大きく力を注ぎます。1574(天正2)年には仮本堂が完成。現存する総門は坂本城城門を移築したもので、鐘楼堂の鐘は陣鐘です。1582(天正10)年にこの世を去った光秀は6年前に亡くなった内室照子や一族の墓とともに西教寺に祀られています。



明智一族の墓



鐘楼(市指定文化財)